

ソーマ祭の潔斎

大島 智靖

ソーマ祭の祭主は、開始時に *dikṣā* (潔斎) と呼ばれる諸儀礼を行う。これは、潔斎に特有の祭式行為や *iṣṭi* (穀物祭) 及び各種献供をも含む一連の複合祭式である。その儀礼工程は従来、特に *Śrauta-Sūtra* 研究を通じて明らかにされているが、各学派の *brāhmaṇa* 部分/*Brāhmaṇa* 文献 (合わせて *br.* とする) において多様に展開する祭式解釈学については依然部分的な考察に留まっており、解明の余地が多く残されている。また大局的には、潔斎諸儀礼がソーマ祭に必須の通過儀礼として固定されるに至った歴史的過程も、やがては検討されるべき問題として控えている。本発表では、未だその全貌が明らかでない *Maitrāyaṇī Saṃhitā* や *Kāṭhaka-Saṃhitā* の *brāhmaṇa* 部分を含め、黒 *Yajurveda* 及び白 *Yajurveda* の *br.* の記述から、総合的に「*br.* の潔斎諸儀礼」を再構築する。さらに、儀礼過程やその解釈を巡る学派間の相違に注意しながら、潔斎思想の一端を論ずるつもりである。潔斎に関する最も詳細にしてまとまった記述は、ソーマ祭の最小単位とされる *Agniṣṭoma* の冒頭に配置されているが、*Yajurveda* 文献群のそれに比して少ないながらも、*Ṛgveda*, *Sāmaveda* 各派の *br.* にも潔斎に関する言及が見出される。さらに、ソーマ祭と結び付いている王権諸儀礼の記述においても同様である。

潔斎に入った祭主 (*dikṣitá*) は、剃毛や沐浴を始めとする浄化儀礼を経て、象徴的に俗世を離れ神々の世界へ赴きつつ (地上から天界への「中間存在」となり)、自身が「供物」となるよう準備をする。一方で「胎児」の擬態を取り、発生学的考察を加えながら胎児に準じた装飾を施され、又胎児のように振舞うことを要求される。さらに諸儀礼を経て *dikṣitá* となったことを公言し、神々の「一員/好ましき者」となるに至る。このような祭主の諸相に関する議論が *br.* における [潔斎] 解釈学の主要テーマである。つまり祭主はある種の「儀礼的再生」を通じて祭式に臨むことになる。しかし一連の解釈が展開していく中で、「中間存在」「供物」「胎児」という諸要素はいかなる関連を持ち、どのような秩序のもとで構築されているのだろうか。テキストが全てを伝えているわけではなく曖昧な部分も残されるが、*br.* の分析を通じて各学派の統一的解釈を考慮しつつ、「潔斎に入った状態とはいかなる状態なのか」について新たな視点を模索したい。

またこの問題に関連して、黒 *Yajurveda* から白 *Yajurveda* への思想的变化にも注目する。*Vājasaneyin* 派の伝える *Śatapatha-Brāhmaṇa* では、特に「供物」に対する解釈、及び「胎児」である祭主の「誕生」に対する解釈において、独自の発展が確認できる。

br. において、潔斎に入った祭主は「自身 (*ātman*) を犠牲にして捧げる」と言われるが、ソーマを搾る本祭の前日即ち準備祭 4 日目の午後に執行される犠牲獣祭 (*Agnīṣomīyapaśu*) によって「自身 (*ātman*) を買い戻す」とされる。潔斎における「供物」化がこの思想に繋がるものと考えられ、ソーマ祭全体に関わる重要な役割を果たしていることが窺える。